



国民的スポーツ（タイ編）

1. はじめに

タイの国民的スポーツと言えば、「ムエタイ」（タイ式ボクシング）、そしてもう一つが「セパタクロー」です。ムエタイは、世界中に広まり、国際的なスポーツイベントになった格闘技です。セパタクローは、このムエタイと人気を二分しています。さながら、日本の国技が格闘技（相撲）で、国民的スポーツとして球技（野球、最近ではサッカー？）が存在しているのと似ていますね。

セパタクローは、SEAゲーム¹やアジア大会等、世界的なスポーツイベントで採用される人気競技です。本稿では、日本の読者の方にも名前以外は未知の世界であろうセパタクローについて紹介したいと思います。

2. セパタクローの略歴

セパタクロー（単に、「タクロー」とも言う）は、国によって呼び方が異なるものの、東南アジア諸国に普及している伝統的なスポーツです。ミャンマーでは「チンロン」、マレーシアでは「セパクラガ」と呼ばれます。「セパタクロー（Sepak Takraw）」という名前は、2つの単語の組み合わせ。セパ（Sepak）は「キック」を意味するマレー語で、日本人男性の名前のようなタクロー（Takraw）は「籐製のボール」を意味するタイ語です。外国人の中には、「セパタクローは中国のカンフーとバレーボールの組み合わせだ」と言う人もいますが、これは、セパタクローの過酷さを言い当てています。

3. ルール

セパタクローでは、バレーボールと同程度

の高さ（プレイヤーの胸の高さ）のネットの両側のコートに、各チーム3人のプレイヤーが並びます（図1）。各チームは、3タッチ以内にネットの反対側の相手コートにボールを送る必要があります。相手コートにボールが着地するとポイントが与えられます。この点は、バレーボールと同様です。各プレイヤーは、手以外の体の部位（頭、足、肩等）を使うことが許されます。これは、サッカーと同様です。



【図1】セパタクローの様子
(出典：www.taringa.net)

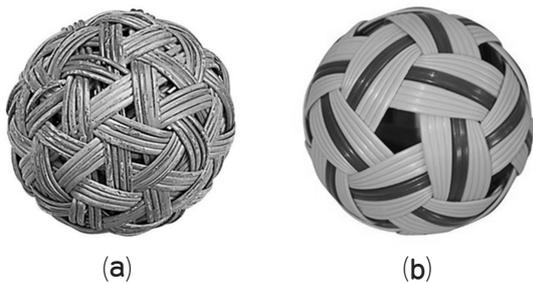
3セットマッチの場合、21ポイントを先取したチームがセットを取ります。そして、2セットを先取したチームが勝者です。サーブ権は、3ポイント毎に移動します。サーブは、コートの外側からサーブします。サーブ以外の2人のプレイヤー（「レフトインサイド」・「ライトインサイド」）は、左右に別れて立ちます。

ボールの性質上、足で扱うのは極めて困難です。したがって、チームプレイが非常に重要です。

4. ボール（タクロー）

セパタクローのボール（Takraw）は、籐（ヤシ科の植物）を織って作られます（図2(a)）。

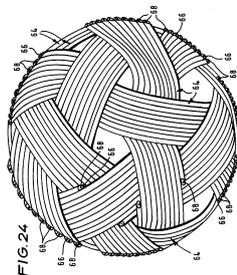
サッカーボールとは異なり、12個の穴があり、内部は中空です。タクローの材料は、家具や籠等にも広く利用されます。タイでは、バンコク郊外のパトゥムタニ県という土地が、タクローの産地として知られています。パトゥムタニ県では、タクローの製造が各家庭の生計を担っています。パトゥムタニ県には、熟練した職人が多く暮らしています。



【図2】

タクローは、あまり弾みません。他の球技で使われるボールより硬いので、体に当たると結構痛いです。特に、初心者はタクローの取り扱いに苦労します。最近では、ストリップに衝撃吸収材(プラスチック等)を使って、衝撃の吸収と、柔軟性及び弾力性を確保したタクローが売られています(図2(b))。多くのメーカーが、タクローの技術開発を行っているのです。将来的には、籐のストリップで作られたタクローは見かけなくなるかもしれません。もちろん、こういった技術は特許(US 5566937等)で保護されています(図3)。

U.S. Patent Oct. 21, 1996 Sheet 6 of 6 5,566,937



【図3】タクローの米国特許図面

5. セパタクロー事情

タイには、2人のレジェンドがいます。

Pomsak Kaokaew と Suebsak Phansueb です。彼らは、強力なスパイクを打つことで有名です。セパタクロー選手としてだけではなく、俳優としても活動しています。2人とも35歳を超えて未だ現役。次世代育成にも力を注いでいます。男女共に世界のトップに君臨するタイの秘密は、彼らのようなスター選手が育成に携わっていることにあります。

6. セパタクローのこれから

国際的なセパタクローの大会は、国際セパタクロー連盟(ISTAF)によって監修され、国際オリンピック委員会にも認定されています。ISTAFの努力により、アジア大会やSEAゲームにも導入されました。近い将来、セパタクローが、オリンピックにも導入されるかもしれません。そうなれば、タイが金メダルを獲得することも夢ではないでしょう。

- 1 東南アジア競技大会。東南アジア限定のスポーツイベント。2年に1回各国で開催。

著者紹介

Dr. Benjapol Kongsombut (เบญจพล)

タイ知的財産弁護士(Patent Attorney)、Tilleke所属。1973年ロブプリ生まれ。名前の由来は「Having five powers including faith, diligence, consciousness, concentration and wisdom」。チューラーロンコーン大学卒業。専門は化学。2011年にIPキャリアをスタート。2016年弁護士試験合格。趣味はバドミントン。好きな言葉は「To begin, begin」。

Mr. Atthachai Homhuan (อรรถชัย)

Tilleke所属。1975年バンコク生まれ。名前の由来は「Victory in Life」。マヒドン大学卒業。専門は薬学。2011年にIPキャリアをスタート。趣味は水泳、ジョギング。好きな言葉は「By yourself and do your best」。
<http://www.tilleke.com/>

編訳者紹介

木本大介(きもと・だいすけ)

日本弁理士、GIP東京所属。1977年神奈川県生まれ。専門は通信、電気、ソフトウェア。2005年弁理士試験合格。企業知財部3年、特許事務所7年の経験を経て2013年7月より現職。モットーは、「正しいモノより楽しいモノを」。
<http://www.giplaw-tokyo.co.jp/jp/>